
『ゆめ』

蝉時雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ゆめ』

【Nコード】

N2372Y

【作者名】

蝉時雨

【あらすじ】

悪夢もあればまた、その反対もある。

みいつけたあ・・・(前書き)

これは私・・・？

みいつけたあ・・・

手に握っているのは・・・何だろう。

赤黒い液体が滴る^{したた}

大きくもなく小さくもない丸いもの。

まだ温かい。

いたるところから流れ出す赤黒い液体。

茶色とも黒ともいえないような細い糸のようなもの。

沢山手に絡みつく。

「・・・うざいな」

私はそれを赤黒く染まった地面に叩きつける。

鈍い音がした。

あたりを見渡す。

私をおびえた目で見る人、泣きじゃくる人、逃げ惑う人

いろいろいた。

いい感じの可愛いのがいる。

ちっちゃいな。

可愛いワンピースを着てウサギのぬいぐるみを持った女の子

「・・・あ、今度はアレにしよう。」

私は女の子に向かって歩き始める。

「だめ！だめ！逃げなきゃ！はやく！」

なんだこいつ。

私が狙っていたのを連れてどこに行こうとしてるんだ

「・・・邪魔だな」

うぜえ。邪魔。

殺しちゃおつか。うん。殺しちゃえ

私はこの邪魔な女に手を伸ばした。

「くあ・・・うあ・・・か・・・はっ・・・」

苦しそうな顔をする女。

手に力を入れた

手が下に垂れ下がる。

殺りがいがないなあ。

あ、私が狙ってた女の子は？

今にも泣きそうな顔で。

やべえ。
コレ欲しいわ。

「い！嫌あああ！」

いいねえ。やっぱりこうじゃないと

「くふつ」

私は女の子を追って走り出す。

支えているところを木の枝を折るように折って

途中で女の子がコケツと転んだ。

手に持ったウサギのぬいぐるみで殴ってくるが

ただ殺るだけじゃあ物足りないな。

ポケットに手をつ込んで何かを探してみる。

あ、これいいじゃんかあ

「・・・さあ、これで何をしようかあ？」

私を取り出したのは針とナイフと短いロープ。

短いロープで手を縛って・・・

「・・・くふっ一回ジンタイカイボーってやつ、

やってみたかったんだあ」

ナイフを手にとってその子の腹部にナイフの先端を押しつけ

・・・開く。

その間にも女の子が泣き叫ぶ声が聞こえていた

「・・・ふふんふんふふん」

気持ちいい。

この奇妙な感触・・・っていうのか？

やっぱり皆一回は経験した方がいいって。まじでさ。

あ、外科医さんは、やってるかもね？

手術が好きな人はいるよね、

絶対楽しくてやめられなくなるもん。

最高だ。最高すぎる。

「・・・ふふんふんふんふん」

さらに上機嫌になる。

あ、針は何に使うか。

とりあえずいいや。

あ、これ、胃じゃね？

写メっておこう。

ポケットを探してみる。

「・・・ちっ」

ねえや。

しゃあねえなあ。

私はさらに切り続ける。

あ、何コレこのグネグネしたやつ。

「・・・腸じゃね？」

引つ張つてみる。ずるずる・・・

「・・・くふつくふふふふ
ずるずる・・・」

まだまだ出てくる

やべえ楽しい。はまるわぁ

いつの間にか女の子の泣き叫ぶ声は聞こえなくて

「・・・なんだ、つまんないの・・・くふっ」

私は立ち上がって次の獲物を探す。

「・・・みいつけたぁ」

みいつけたあ・・・（後書き）

次の獲物は君・・・かもね？

遊ばお？（前書き）

遊ばお？

私は．．．小学3年生？

私が卒業した小学校だ。見覚えのある風景。
教室を．．．誰もいない教室を出る。

廊下にも

「．．．誰もいない。」

なぜだろう。

隣にあつた図書室。

鍵は掛かつてないみたい。

「．．．」

中にも誰もいない。どうして？

私は奥に進んだ。新本コーナーがあつた。

「あ．．．」

なぜかはわからないけど、私はある本に引かれた。

私は手にとって表紙を見る。

本の題名は、> 吉夢のような悪夢<

よくわかんないな。

表紙をめくる。

「わぁ．．．可愛い絵．．．」

パツと見ただけだった。

「．．．え?!」

小さくて可愛い少女が．．．

人の．．．バラバラになつた人たちの上で

踊り狂つてる絵だった。

なぜ可愛いかと思つたのかは、

バラバラになつた人たちが真っ赤だったので

莓が何かだと思つていたからである。

背景の色は．．．

「あ．．．れ？」

背景の色が変わってる？！

さっきまでピンクだったのに

「え？！あ．．．赤？黒？」

みたいな色に。

「いい絵、だろ？」

「え？！！！！！」

誰もいないはずの図書室．．．私の後ろで声がした。
振返ってみたけど誰もいない。

「え？！え？！は？！」

辺りを見渡してみたけど、やっぱり誰もいない。
しかし、

「うふふふふふ」とか

「きやはは」とか

「なあに？あの子」とか

「かあわいい」とか

色々聞こえてくるのだ。

私は怖くなつて図書室を飛び出した。

「い．．．いやあああああああああ！！！！！！！！！！」

本も置いてきたかったのだけど、

どうしてか離れない。

「どうしてよ！どうして離れないのよ！」

3階（図書室前）．．．2階．．．1階．．．

私は疲れて走れなくなってしまった。

足がガクガクいつてる。

恐怖のせいもあるのだろう。

だって、

「なん．．．でっ．．．っあ．．．声が消えないのよおおおお！！！！」
ずっと、ずっと、ずっと、私の後ろで声がするのにつ！

なんで．．．なんで．．．周りには誰もいないのよお．．．
「くすすす」

「体力ないなあ、ダメだよお??」

「きやはは かあわいい」

もう．．．もう．．．

「．．．やめてよお」

私が何をしたって言うの?もうやだよ、怖いよお
私はあまりの恐怖に泣き出してしまった。

「あああ、泣かせちゃった きやははは」

「くすす、可愛いのね」

「どおする?」

「「「やっぱ．．．殺しちゃう?」」」

え?!やだ、やだやだやだやだ!!!!

足!動け!足!足!!

「きやは はい、決定ー!」

「くすす、ばあいばい」

「仲間になつてもらいましょ、彼女可愛いし」

「あいねえそれ きやはははは」

「あら?」

立て!走れ!

「ん~~~~~!!!!!!」

たっ．．．たっ．．．たつたっ．．．たたたた．．．こて
走れた。けど、すぐ転んだ。

やつぱり、無理だったか。やだな、死んじゃうんだ。

「．．．あはは」

なぜだろう、笑がこみ上げてきて

「なあに?この子、おかしくなっちゃった?」

「きやはは 発狂しちゃった?」

「くすすくすす．．．」

もう、色々大事なものが飛んだのか、

「詳しく言つと私達には体はない。

それは、あんたもわかつてるよね？

今までは、あんたが図書室で手に取った本に
私たちが憑いていたんだよ。

で、あんたがそれを持つちゃったから

私達はいつでも、あんたに乗り移れるようになった。
で、今がそれ。」

意味、わかんない。

「しょうがないわねえ・・・

つまり私達があんたを乗っ取ったってこと。

あんたは、弾き出されて本に。ってこと。」

ああ。

「納得してくれた？」

するかああああああ！！！！！！！！

誰が納得するものか。

「だよね・・・っと。到着！。」

え？

「屋上！。頭からがいい？足からがいい？」

え？えあ？

「遅い。じゃあ、頭からね！。決定！。

ばいばーい。きやはは」

私は私よにんわたしを置いて、飛んだ。

「きゃっほーーい」

楽しそうに。

ぐしゃ・・・

鈍い音がした。その瞬間私もふわっとした感じになった。
そして、私は外に弾き出された。

「気分はどう？」

本がしゃべってる。

いや、あの4人が本に戻って、しゃべってるのか。

ん？何かがおかしくない？

私はあの本になったとき、しゃべれなかったんだよ？
なんで？

つか、前に本があるのに、なんで後ろから声がするんだ？

「きやはは、なんだって私たちは1万年くらい

この本の中にいたんだから。」

い．．．1万年？！

「そだよ？どうやってウチらが生まれたか

なんて覚えてないけど。それより、あんたの体。」

え？．．．ああえ？

あるけど．．．半透明？
触れる。

「どう？って聞いてるんだけど？」

「．．．．．。」

「ねえ？」

「．．．はは

「？」

「あは．．．あはははははははは最高だよ！最高！」

「また、なくかと思っただけど．．．」

「え？！何か言った？！」

やべえ、何コレ、すっげえじゃん。

「何でも、できるよ。何でも。」

「まじか！やつほーい」

「ねえ、私たちの仲間にならない？」

「え？！いいよ？」

「ふふっ．．．ありがとう。」

「じゃあ、遊ばお？」

遊ばお？（後書き）

これからずっとずっと・・・ね？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2372y/>

『ゆめ』

2011年11月6日10時09分発行